

カフカの「城」に関する試論(9) : ゲルシュテッカーをめぐる覚書

著者	芳野 昇
雑誌名	日本歯科大学紀要. 一般教育系
巻	19
ページ	7-19
発行年	1990-03-20
URL	http://doi.org/10.14983/00000356



カフカの「城」に関する試論

IX. ゲルシュテッカーをめぐる覚書

Versuch über Franz Kafkas Schloß

IX. Notiz um Gerstäcker

新潟歯学部 芳 野 昇

Noboru YOSHINO: The Nippon Dental University, Hamaura-cho 1-8,
Niigata 951, JAPAN

(1989年11月28日 受理)

1

Franz Kafka の『城』(Das Schloß)の中に登場する人物は大勢であって、この作品は一面自伝的な長編小説の色彩を持つことを重ね合せて考えてみると、各々の登場人物を作者 Kafka の様々な人間関係と対応させて読み進めることも可能となる。筆者はすでに主要なる女性像である Amalia, Olga そして Frieda をめぐる覚書を試みてきたが¹⁾、主要なる男性像となると、主人公 K はもちろん、長官 Klamm, 役人 Sortini や Erlanger, 使者 Barnabas とその父親, 村長や村の教師, 村人の Brunswick と Lasemann, 更に二人の助手, そして駈者の Gerstäcker と、興味深い人物像が枚挙できる。

本稿では第1章から登場して、主人公 K と伏線的に関わりを持ち、最後の25章の最終場面である意味合いを込めて K と立ち会う、村の駈者 Gerstäcker の形姿を分析してみる。

2

2.1. K と Gerstäcker との最初の出会いの場面は第1章の終結部である。村のなめし革屋とその仲間達 (der Gerbermeister und seine Genosse) から追い払われ、深い雪の

中でKは一人で（mit dem ihn einfüllenden Schnee allein）ちょっとばかり絶望して（Gelegenheit zu einer kleinen Verzweiflung）立っている時、城ではなくて、宿屋（Wirtshaus）にKをしぶしぶ案内する馭者（Fuhrmann）として Gerstäcker は姿を現わす。この Gerstäcker はその直前に「あれは例の測量技師だ（Es ist der Landvermesser）」²⁾という、小屋（Hütte）から聞える男の声の主として登場する。「ここには一台も橇はないし、ここに（城への）いかなる交通手段もない」³⁾と重ねて主張して、Kをあくまで城へ向かわすことを拒みつつけるような、「ある種のどんなに頼み込んでも聞き入れない頑固さを持った（mit einer gewissen Unerbittlichkeit）」⁴⁾、老けた褐色の眼（alte braune Augen）の持主である。しかし、結局は雪の中で足を取られて進めないでいるKを、無料（nichts）で宿屋に送ってやるという何かの意図をいだいてか、Gerstäcker は橇の準備をすでにしていた。

「これらすべては特別の親切（besonderer Freundlichkeit）だという印象づけるものではなくて、むしろKをこの家の前の広場から追い払うための、ある種の実に利己的で、臆病で、ほとんど小心翼翼な努力（einer Art sehr eigenstüchtigen ängstlichen fast pedantischen Bestrebens）をしている印象であった」⁵⁾。

以上のように主人公Kの眼前に姿を現わさないうちに、作者KafkaはGerstäckerの作中の領分を提示している。要約すれば頑固で無情な（unerbittlich）、利己的で（eigenstüchtig）、臆病でおずおずといて（ängstlich）、かつ小心翼翼とした男（pedantisch）として、多くは虐げられている人物として登場させている。しかしボヘミアの農夫の原型というには、どこか素姓が不明で異端の影が秘められてあり、またR.Sheppardが指適しているように⁶⁾、冗漫さと辛辣なイロニーを含み持った人物像でもあり、更に深刻には西ユダヤ遊牧民の社会的運命を担った形姿をも予測できよう。

さてGerstäckerはようやく姿を現わす手筈となる。

2.2. 中庭の門が開いて、全く平板で、どこにも座席の見あたらない軽い荷物運搬用の小さな橇（Schlitten）が、貧弱な小馬に引かれて出てきた。その後に年老いてはいないが弱々しく（nicht alt aber schwach）、猫背で（gebückt）、びっこを引きながら（hinkend）、痩せこけて、赤い鼻風邪をひいた顔をした（mit magerem rotem verschnupftem Gesicht）男が出てきた。その顔は首のまわりに、しっかりと巻いた毛皮の襟巻きのせいで、特に小さく思われた。この男は一目でそれと分るほど病気にかかっている（sichtlich krank）、ただKを追い払うためにのみ現われたのだ。Kはちょっとしたことを述べたが、この男は言葉をさえぎった。ただKはこの男が馭者ゲルシュテッカー（der Fuhrmann Gerstäcker）で、その上で彼（Gerstäcker）はこの乗り心地のよくない橇

を出したのは、丁度準備をしていたからで、別の櫓を引き出すにはひどく時間が必要だろうということだけが知らされた」⁷⁾。

これらの短い主人公 K との対話の中に、すでにこの人物 Gerstäcker のどこか屈折して老けた姿、天邪鬼的な優柔さ、更には愚直な中に K に対して密かに何か意図を持って対応する老獪さが読み取れよう。それはこの城に支配される一寒村の男達に一面共通した生きる姿勢でもあるが、とりわけ村の馭者 Gerstäcker の中に多く集約された気質である。そしてまた極言すれば、この作品「城」を執筆中の晩年の作者 Kafka の形姿が、K のみならずこの Gerstäcker の中に投影していると考えられよう。

この病弱でびっこを引く Gerstäcker の一面痛ましい姿は作品『城』の中では助手の一人 Jeremias や役人 Erlanger がびっこを引いている (hinkend) のに相似しているし、また他の作品では『変身』の中で傷を負わされた Gregor Samsa や「歌姫ヨゼフィーネ」の中の女主人公 Josefine に共通する身体の障害である。何よりもこの Samsa と Josefine は Kafka の作品の登場する極めて個性的な主人公役の人物である事からして注目に値えしよう。

M.Robert は村人 Lasemann や Brunswick と並んで Gerstäcker の命名は村人としては取っつきにくい名前とはいえ、「ドイツのいかなる地方でも見過ごされる人名だ」⁸⁾ としている。また H.Binder は Gerstäcker の命名に関して、Kafka が「彼の両親のわずかな蔵書の中で Friedrich Gerstäcker の傑作、ある通俗小説を見出し」⁹⁾ と報告している。

2.3. K はその日のうちに城に行きたいと願い、取りあえず Gerstäcker の櫓に乗って出掛ける。「>私は君の脇に (neben Euch) 腰かけよう<と K は言った。>一体どうして<、と K は尋ねた。>わしは歩いて行きますぜ<、と Gerstäcker は繰り返して咳の発作 (Hustenfall) を起こした。その発作は彼の全身をひどく震わせたので、雪の中で両足 (die Beine) をふんばり、両手で櫓のへりを握まなければならなかった。K はそれ以上何も言わないで、櫓の座席に坐った。その咳はしだいに治まって、櫓は走り出した」¹⁰⁾。

Gerstäcker は作者 Kafka と同様におそらく結核を患っていると考えられる。Kafka の持病、肺結核は強い咳をとめない、強度の体重減少が作用したといわれる。いずれにせよ、この Gerstäcker の咳の音は人影のない、夕闇迫るこの雪の中の寒村に、空しく響きわたり、1つの仄暗い音色となって、K の耳につきまとい、いつまでも余韻するのであった。

この櫓での走行の場面では作者 Kafka の日記によれば、作品『城』の執筆期の 1922 年初めに Spindlermühle で出会った御者が下敷となり¹¹⁾、また Kafka の病状も重なり合っ

て、少なくとも第1章では最も印象深く、かつ謎めいた人物の一人、馭者 Gerstäcker を登場させている。そして理由を語らず K と同乗しようとしないう Gerstäcker の姿勢は、他の村人達が異邦人 K と同席しようせず、悪辣で危険な男 K と同一視されることを頑なに拒絶する姿勢と共通するものであり、一方、いずれ馬丁の身分にまで落ちぶれていく K の姿を仮説した時、まるでやがての自らの姿と同類させるかのうよな、暗示的な Gerstäcker の挙動を読み取ることは不可能ではない。

2.4. K が近づこうとすればするほど、上方に高く聳^{もつ}える城から遠くなるというディレンマの中で、夕暮れ時、城からの一時の別れの合図なのか (zum vorläufigen Abschied ein Zeichen)、鐘の音 (Geklingel) が響いてくる。K には憧憬と脅迫というアンビバレンツ的な感情がこみ上げてきて、むしろ痛ましき (schmerzlich) さえ感じられる鐘の音が響きわたり、この城の鐘が遠のくと、村のあたりで、弱々しく (schwach)、単調な (eintönig) 鐘の音が聞こえてくる。正しく馭者 Gerstäcker の登場と立ち去る形姿にぴったりではないか。K はこの Gerstäcker の姿と相似させ、重ね合せて、この2つの鐘の音を聴き分けている。「この鐘の音はもちろんゆっくりとした櫓^{あゆみ}の歩行と、(同情すべく) 哀れだが、頑固で無情な馭者に (dem jammerlichen aber unerbittlichen Fuhrmann) ぴったりとしてふさわしい」¹²⁾。

2.5. 城への道を故意に避けて、ゆっくりと村道を徘徊する Gerstäcker の櫓の運行に K は堪忍袋の緒が切れてか、黙々と馬の手綱^{たづな}を取って歩く Gerstäcker に向って、自分勝手にあちこちと引きづり回す権利があるのかと怒鳴りつけて、雪をまるめて Gerstäcker の耳に命中させる。しかし相変らず無表情でいる Gerstäcker に一種の同情の念 (Mitleid) が湧いてきた、と K の叙述は展開する。

「この猫背で、幾分か虐待されている姿 (diese gebückte, gewissenmaßen mißhandelte Gestalt)、赤く疲れて、痩せた顔 (das rote müde schmale Gesicht)、どこことなくアンバランスな頬、二三本のばらばらの歯だけの、何かを聞き出そうとしてか、開けられた口、そうしたものを見つめていると、K はさっきほど悪意から (aus Bosheit) 言ったことを、今は同情の気持から (aus Mitleid)、> Gerstäcker, 君は私 (K) を運んだことで罰せられる (gestraft werden könne) かどうかく 繰り返して聞かざるをえなかったのだ。> 貴方^{あんた}は何を言たいんですかい、と Gerstäcker は理解できず尋ねたが、更にそれ以上 K の説明を期待するようでもなく、小馬に声をかけて、櫓は再び先に進んでいくのであった」¹³⁾。

ここでの Gerstäcker の描写は前述の 2.1.5) の引用を重ね合せて読むと、老けてはいるが、年寄りではなく、30才前後の青年 K よりむしろ、執筆時の作者 Kafka の年令に

近い、40才前後の壮年 Gerstäcker の姿が鮮明になってくる。それにしてもまるで画家 P.Brühgel の農夫に描かれてある無感覚で無表情な人物像が込められているようだ。そして作者 Kafka が同情の気持を表白しながらも、持前の手法、つまり特異なりアリズムとピカレスク文学的描写法を並存させて、淡々と語りつづる Kafka 一流の手法が遺憾なく発揮されている場面とも考えられよう。

W.Emrich は「Gerstäcker はすべての農夫達のように支配している生の諸力に意志のない、本当に>虐待された< (mißhandeltes) 物像 (Objekt) である。>自己の責務< (eigene Verantwortung) のような観念に対して彼は全く>無理解なく (verständnisslos) 態度をとる。村にはいかなる自由もない。しかしそのことの予感^{予感}はすべての村人に生きづいて^{生きづいて}いる。正にこのことが K に農夫達が魅惑されるが、同時に愕然として怯えていることなのである。Gerstäcker も K の価値 (Bedeutung) にある種の予感をいただいているのだ」¹⁴⁾、と主張している。

2.6. 現在底本に使用されている Kafka 全集である、Max Brod 編集による第3版 (1946年版) と Malcolm Pasley 編集による校訂版 (1982年発刊) とでは各章の区分に異同がある。以下の引用箇所は Brod 版では章が改まって、第2章冒頭部に位置しているが、校訂版 (Kritische Ausgabe) では第1章の最終部となっている。Brod による出版の際の校正の方が、物語の展開からしてむしろ不自然に思われる。

夕闇迫る中、ようやく Gerstäcker に案内されて宿屋に戻った K は、この寒村の冬の日が短く暮れていくのを嘆きながら、そそくさと櫓を降りて、宿に入ろうとする。「彼 (K) を大変歓迎して、宿の小さな正面階段の上の方に立って、宿の亭主はカンテラを掲げて、彼 (K) の方を照らしてくれた。K はひょっと (flüchtig) 取者 (Gerstäcker) のことを思い付いて立ちどまった。どこか暗闇の中で (im Dunkel) 咳の音がして、あの咳は彼だ。まあいいや、とにかく自分 (K) は近いうちに彼 (Gerstäcker) と再会するだろう」¹⁵⁾。

ここで使用されている flüchtig は作品『城』の中で多用されている Kafka の常套語の一つで、eilig (急いで)、oberflächlich (表向き)あるいは vergänglich (うつろに) などと同義で、前後12回程用いられている。

2.7. この Gerstäcker との再会を思わず期する K は、これ以降 Brod 版では第17章冒頭で、校訂版では21章の中間部で、再会をまず果たすことになる。作品『城』の全編は少くとも5泊6日の城のある村での滞在物語とすれば、正しく近いうちに (nächstens) 二人の再会は期せずして実現されることとなった。

第8章で主人公 K は村の酒場 (Ausschank) にて Frieda の後釜の Pepi と初対面した

後、紳士館（Herrenhof）で長官 Klamm を待伏せしようとして、先日その酒場で見た農夫の一人である御者（Kutscher）に会う。Gerstäcker は Fuhrmann, その男は Kutscher と Kafka はドイツ語を区別して使っていると考えられる。Kutscher はおおむね Lenker eines Pferdewagens とか der gräfliche, herrschaftliche Kutscher を意味していて、幾分な高級な幌付きの箱馬車（Kutsche）と二頭立ての馬を鞭（むち）でもって御する上級の御者といってよいだろう。一方 Fuhrmann は Fahrer eines Pferdewagens ということとなり、荷車用の車力（Fuhrmann）を意味するとなると、Kutscher と Fuhrmann 両者の間に明らかに待遇や地位の差異が認められよう。この Gerstäcker はもちろん村の Fuhrmann で下級の運搬業者で、むしろ馬丁（Pferdeknecht）に近い身分なのかも知れない。ともかく作品『城』では雪の中で走行するため荷車を橇に変えて両者は登場している。

「暗い紳士館の前で男達の小さな群（ぐん）が立っていて、そのうちの二、三人が小型カンテラを手にしていたので、幾人かの顔の見分けがついた。K には馭者の Gerstäcker だけが顔見知りであった。Gerstäcker は彼（K）に次のような問いを發して挨拶をした。>相変わらず村に居るんですか、>そうさくと K は言って、>私はずっと（ここに）居るために遣（お）って来たのさ（ich bin für die Dauer gekommen）、>わしはどちらでも構いませんがね、と Gerstäcker は言って、激しく咳をして、他の男の方に向きを変えるのであった」¹⁶⁾。

2.8. この21章（Brod版では17章）の終結部で役人 Erlanger の到着を待って、陳情者達（Parteien）に混って従僕達（Diener）と話している Gerstäcker の姿がある。城から村へ降りて来ると生活の勝手が違うのか、疲れ切って、さも村での仕事は氣儘（きまま）な仕事（freiwillige Arbeit）であるかのように、いつまでも眠りこけている勝手な役人達、その一人の Erlanger への陳情を主人公 K と並んで望んでいる Gerstäcker の姿である。

「>貴方（あなた）は建築資材の運搬請負のために来られたんですね」と従僕は問い正すのであった。Gerstäcker は首肯（うなづ）いて、その従僕を脇（わき）に引っぱり込んで、小声で（leise）、その彼に向って話しかけるが、その従僕の方はほとんど聞いていなく、首一つ分だけ背が高い従僕は Gerstäcker を頭越しに向うを見て、生真面目（ernst）にゆっくりと自分の髪の毛を撫（な）でていた」¹⁷⁾。

びっこを引き、病弱の身である Gerstäcker は更に小男となると、その風貌の貧相な様子が十分想像できよう。

ここで Gerstäcker の挙動の一つとして何気なく使用されている leise は、同意語の ruhig が全編中多用されているのに比べて、4回程度しか用いられてないが、小声で

(leise) ささやくこの Gerstäcker の姿には小心さと、不安さと、何よりもすっかり老化している彼の容体を暗示していると思われる。また対応する従僕の挙動として使用されている ernst は、同意語の ernsthaft, ernstlich あるいは Ernst を加えると、少なくとも 10 回以上用いられる副詞で、概して些細な事や末梢的な事を生真面目に対処する人物の愚直さを風刺しているとも考えられよう。

2.9. 最終章の冒頭、主人公 K は村に到着してこのかた、ついに疲労困憊したせいか、半日以上も (weit über zwölf Stunden) 眠り込んでしまうのである。そしてまだまだ眠り足らなく、ほとんど眠ったとは思えない (kaum geschlafen zu haben) でいる K に向けて、眠り込んでいる間に橋屋の女将 (Wirtin) も Gerstäcker も話にやっ来た、と Pepi が告げる。

「Gerstäcker も貴方 (K) が女将さんと話していた朝方なんかは、この暗がりの中でビールを飲みながら待っていましたが、それ以上は貴方を邪魔したくなかったのでしょう、貴方の眠っている間に、ついにもう一度様子を見にやって来ましたよ」¹⁸⁾。

結局は未完に終わった Kafka の最後の長編小説『城』は、最終場面が他ならぬ橋屋の女将と Gerstäcker に、K が自らの意に反して、まつわられる場面で中断している。しかもこの両者との対話も、むしろ中断されない限り、ほとんど大きな進展もなく、ただ叙述が長長とつづき、おそらくこの作品がひたすら長編化の一途をたどるしかなかったであろう。

2.10. どうやう病身の馭者 Gerstäcker は K に何か話したい事があるようだ。

「しかしもう一つ邪魔 (noch eine Störung) が入った。Gerstäcker は玄関のところで待っていて、K と話したいという事だ。彼 (Gerstäcker) を払いのけるのは容易ではなかった。女将も助けをかってでて、Gerstäcker の厚かましき (seine Zudringlichkeit) を叱責した。>一体どこへく、>一体どこへ行きなさるく、と叫ぶ Gerstäcker の声がすでに戸口のドアが閉められていても、まだ聞こえてきて、その上、彼の言葉には溜息と咳とが (mit Seufzen und Husten) 厭わしく (häßlich) 混っていた」¹⁹⁾。

ひたすら城からの滞在許可を求め、奔走する主人公 K は、逆にまた多くの人物に無益なほどまどわれる。Gerstäcker もその一人ということになるが、彼の厚かましきは橋屋の女将のそれ以上なのであろうか、Gerstäcker の領分である溜息と咳とは執拗に気にかかり、かつてはふと同情さえいだいた K にとっては、今となってはもはや厭わしく (häßlich) さえ感じられてきたのであろう。

Brod 編第 3 版の最後は K が女将との口論の末、「>おまえさんは馬鹿か、子供か、それとも実に質の悪い危険な人間のいずれかだよ (Du bist entweder ein Narr oder ein Kind oder ein sehr böser, gefährlicher Mensch)<、と追い返えされて、玄関に出てき

たKが、>明日新しい服が手に入るから、もしかしたらおまえさんを呼びにやらせるよ<」²⁰⁾、という女将の罵声を背後から浴びせられる箇処で中断して作品が終っているが、校訂版では後述するように、戸口の外でGerstäckerがKを待ち構えて、Kの袖口を掴む場面がつづくのである。

Brod編の第3版はここで20章をもって中断されている。Gerstäckerのこの執拗さは何をKから要求してやまないのか、あるいはまたKに何を助言しようとしてやまない行動なのか、このBrod版の本文を読む限りは定かではない。

2.11. 校訂版の最後の場面は主人公KがこのGerstäckerにせがまれて老母と住む彼の小屋（Hütte）の部屋（Stube）を訪れる場面となっていて、次の叙述で全編を中断している。

「まるで彼（Gerstäcker）を邪魔する女将を遠くから黙らせるかのように、腹立てて（ärgerlich）、片手を振り回しながら、GerstäckerはKに自分と一緒に来るように催促した。真っ先により詳しい説明に取りかかるつもりはなかった。自分（K）が今学校へ行かねばならないというKの異議をほとんど無視していた。これに対してKが彼に引きづられて行くのを拒んだ時に初めてGerstäckerは、心配することはなく、彼（K）に必要なものは何でも揃っているし、学校の小使の職などを（den Schuldienerposten）やめることが出来るし、さあもうただ来てもらうだけでよいので、一日中自分（Gerstäcker）は彼（K）を待っていて、自分の母親なぞは自分がどこにいるのか全く分らないくらいだった、と言うのであった。Kは彼にせがまれて、つついっゆっくりと要望を聞き入れながら（langsam ihm nachgebend）、一体どうして彼（Gerstäcker）が彼（K）に食事と住居（Kost und Wohnung）を提供するつもりなのか尋ねるのであった。するとGerstäckerはぞんざいに（flüchtig）自分はKを馬の世話のために必要で、自分自身は今別のいろんな業務にかかわっていると、それにしても、もういい加減にKは自分から引っぱってもらって歩くのはよしてほしく、自分にあれこれ不必要な文句をつけて、手子づらさないでほしい、と答えるのであった。もし彼（K）が報酬を望むなら自分が彼（K）に支払うのであらうと。Kはしかしどんなに引きづって行こうとしても立ちどまろうとするのであった。彼（K）は馬の事は何も心得ていないと言う。そんな事は必要ありませんよ、Gerstäckerは我慢できずに（ungeduldig）、Kを同行させんがために腹立たしく（vor Ärger）両手を組み合わせる。>私はおまえが私を何故一緒に連れて行こうとするか分っているさく、とKはついに（endlich）言った。GerstäckerにはKが知っていることなぞはどうでもよかった（gleichgültig）。>私がErlangerのところでおまえのために何かを押し通してくれる（durchsetzen）、と思っているからだろく、>確か

にそうです(gewiß)く、と Gerstäcker は言った。>さもなければわしにとって貴方が何で大事でありましょうか< (Was läge mir sonst an Dir)く。K は笑って、Gerstäcker の腕にもたれて、暗闇の中を (durch die Finsternis) 連れ去られていくのだった。

Gerstäcker のぼろ屋 (Hütte) の小室 (Stube) はかまどの火とろうそくの残部によってだけぼんやりと照らされていて、その^{あかり}灯光のそばの突出して斜めに傾いた小屋梁 (Dachbalken) の下の、部屋の張り出し (Nische) のところで、誰れかが本を読んでいた。それ Gerstäcker の母親であった。彼女は震える手を K にさし出して、自分の脇に彼 (K) を座らせ、難儀そうに (mühselig) 口をきいたが、彼女の言葉を理解するのは一苦勞であった、がしかし彼女が言っていたことは²¹⁾。(中断)

いきなり中断されている作品『城』のこの最後の叙述は Brod 版では第 3 版の後記 (Nachwort) に補足されている²²⁾。

ともかくここでもまた Gerstäcker の領分でもある、ärgerlich, flüchtig, ungeduldig, gleichgültig といった挙動の形容がくりかえされている。更に他の unerbittlich, eigen-süchtigそして他ならぬ gebückt という形容は gewissermassen mißhandelte Gestalt として Gerstäcker を、村人 Lasemann の旺盛な生活欲の姿と対比して理解し、そこには明らかに世紀末的な死の騎士の観念を (den Gedanken an den Todesreiter) E. M. Rajec は含ませている²³⁾。そして作者 Kafka の病状の悪化を考慮に入れて、迫りくる死の予感、あるいは死の影を意識した、主人公 K と馭者 Gerstäcker の対話は不気味な調子をもった、ほとんど死者の会話として S. Richard が見なしている²⁴⁾。

いずれにせよ主人公 K はこの城のある村での遍歴の最終段階は Gerstäcker の申し出に従って、彼 Gerstäcker の馬屋の馬丁 (Pferdeknecht) として働くということが推論できようか。この問いに対して H. Binder は「この質問は是定できる。つまり Gerstäcker は第 1 章の最後でいわば象徴的筋の展開 (Symbolhandlung) として練り上げられ、物語の出発点の宿屋>橋屋< (zur Brücke) に彼 (Gerstäcker) が K を引き戻すという、この長編小説の筋立が大いに開陳されていることとなる」²⁵⁾。そして更に主人公 K の立場からすると、「Kafka がこの測量技師 (K) を Gerstäcker の馬屋の馬丁として落ちぶれさせるという、本文からの推測に対する (自伝的な) 資料上で示唆に豊んでいるものとして、Kafka を西ユダヤ人の典型的な代表者であった、とする Minze Eisner の報告は役立つであろう」²⁶⁾、と H. Binder は注釈を加えている。

いずれにせよ Gerstäcker の形姿は主人公 K の行く着く先の姿となれば、正に K の現在のはかつての Gerstäcker に相似していて、K の成りの果ては Gerstäcker を予測することは可能となる。W. Kraft はこの箇処にふれて、「しかし問題はゲルシュテッカーやラー

ゼマンと同じ人間になることではない。なぜなら仕事から離れているような存在は、城の知るところではないからである」²⁷⁾、と一介の村の労働者をKの未来像としている。またM.Robertもこの事を言及して、KがGerstäckerに似ていくことについて、「この同化はたしかに彼(K)の目的の一つにすぎないが、それを熱望する限りは、彼は未来の市民達に順応し、彼等の慣例に精通してそれに従い、彼等が好もうと好むまいと、彼等に似なくてはならない。彼の焦眉の課題はしたがって、知らないがために社会の除け者にされている衣服上の礼儀を解説することである。しかしこれを知ると、さらに解決しがたい諸問題が課せられる」²⁸⁾、と説明して、大局的に見て、Gerstäckerに同化することがKの村での定住を保証すると見なされながら、当のKは直面する仔細な問題にかかわらざるをえないが故に、その期待の達成はいつまでも混沌としたままで終始する、停滞した運命にあることを示唆している。

2.12. Max Brod編の『城』(Das Schloß)の第3版の後記には、前項2.11に引用した本文の叙述に先立つ数頁にわたる抹消箇所である、異稿(Variante)が明記されている。この抹消箇所はM.Pasley編の『城』の校訂版の考証資料(Apparatband)には本文の476頁に挿入される段落(Absatz)として、以下のKとGerstäckerの対話(Dialog)が収録されている。

「今やついに Gerstäcker は自分のための時間がやって来たと思った。彼はずっと K に聞き入れてもらおうという努力をしていたにもかかわらず、明らかに(本心とは)別なふう^{ぶんふう}に言いたかったのか、全く不躰^{ふしつけ}に(recht grob)次のように切り出した。>貴方^{あなた}は職(eine Stelle)があるんですかい<と尋ねた。>そうさ<と K は言う。>昨日 Erlanger と話したからね<、>Erlanger とですって<、>君もそれを知っているはずだよ。私を飽き飽きさせないでくれよ。向うへ行ってくれよ。私を放っておいてくれたまえ<、>まあまあ、そう言わないで下さいよ。貴方は Erlanger と話し合ったことは秘密(ein Geheimnis)だと思いました。<、>君とは私は自分のいろんな秘密事なんか分ち合わないだろうよ。私が君の家の戸口の前で雪に足を取られて動けないでいる時に、私にがみがみ言ったのは、だって君だったじゃないか<、>でもわしはしかしそれから貴方を橋屋(Brückenhof)まで乗せましたぜ<、>それは確かだ、それに私は君に車代を支払っていなかった。いくら君はほしいのかね<、>貴方はあり余る程のお金を(überflüssiges Geld)をお待ちなんですかい、貴方は学校で手当でもよいんですかい<、>十分足りているさ<、>わしはもっと払いがよい職を知っているのだがね<、>君のところでも言うのかい。馬の仕事(bei den Pferden)とでも。御免だね(danke)<、>誰れがそんな事を貴方に言いましたか<、>だって君は昨夜から私をつかまえようと待ち伏せし

ていたじゃないか、>いいですか、それは貴方の大いなる思い違いですよ、>私が思い違いしているとなれば、それはそれで一層結構な事さく、>わしは苦境にいる（in deiner Notlage）貴方を見て、れっきとした測量技師で（einen Landvermesser）、教養のある男（einen gebildeten Mann）の貴方が、汚れて、ぼろぼろの衣服を着て、毛皮も着ずに、落ちぶれてる（heruntergekommen）貴方をおそらく扶助している、あの小さな顔をした（mit dem kleinen Fratzen）Pepiと仲よく暮して、（彼女に）頼るはめになっている、そんな貴方を見て、今やっと、いつかわしの母が次のように言ったのを思い出しましたよ。>この男を堕落させてはならない（Diesen Mann sollte man nicht verkommen lassen）<とく、>そいつはいい言葉だ。だからといって今から君のところへは行かないさく」²⁹⁾。いずれもカフカの『城』の本文には削除された箇処だけに、いささか長い引用となったが直訳を施した。KとGerstäckerの対話が実に冗談めいた皮肉を混えて、実に生き生きと描写されていて、両者の関係を知るのに適切な場面であるだけに、作者Kafkaの削除の真意は測り知れない。

Gerstäckerの母親とは前項2.11.21)に引用した校訂版の最後に登場して、Kに震える手を（die zitternde Hand）をさし出した老婆のことであり、すでに第1章で雪の中で立っているKを指して、「>あそこに彼（K）がいるよく、と震える女の声（Eine zittrige Frauenstimme）が言うのをKは聞いた」³⁰⁾、とある。恐らくその女声の持主であり、まだ姿を見せていなかった老女である。

W.Emrichはこの謎めいた最終場面について次のように論究している。「Kは村の中で、ほとんど消えようとしている蠟燭の火のそばで、暖炉の火に向って座りながら本を読んでいる一人の高齢な女と直面させられる。彼女はR.Grayがすでに指摘しているが、（北欧の運命の女神）ノルネ（Norne）か、あるいは（女予言者なる）巫女の印象を与える。従ってGrayもKafkaがこのことによって、K自身の死への切迫（K's eigene Nähe zum Tod）を比喩的な表現したのだ、と推論している。このこともまた仮説（Hypothese）にすぎない。しかしこの仮説はこの長編小説の全体的構成に基づいてみると、1つの高度な（的中している可能性のある）確率度を持ち合わせているのである」³¹⁾。

3

本稿ではまず最新の校訂版（Kritische Ausgabe）を底本として、本文中のGerstäckerの叙述を中心に概ねその分析を試みた。少なくとも本文に登場するGerstäckerの姿は、東欧の一寒村の冬の日の馭者の姿としては典型的であり、実像的でもあるが、もしこの作

品『城』が中断されず、更に書き続けられて、この Gerstäcker の形姿が益々色濃く K の将来像と結びつけて仮説できるなら、早くに主人公 K の影として Gerstäcker は暗示的な、あるいは象徴的な姿として登場しているのだ、と見なす事も可能となろう。ただ K と Gerstäcker の本格的な対話の直前で中断され、未完に終わってしまった長編小説『城』という事実からすると、多くの推測を排して言えば、Pepi と同様、Gerstäcker もまた実に印象深い登場人物の一人でありながらも、作品と運命を同じくして、謎めいて中途の人物像のまま中断されたと言わざるをえない。

Anmerkungen

- 1) Vgl. Amalia については拙論：カフカの「城」に関する試論II、アマーリアをめぐる覚書（長岡工業高等専門学校紀要第14巻1号1978）、Olga については拙論：カフカの「城」に関する試論VI、オルガをめぐる覚書（日本歯科大学紀要第16号、1987）、Frieda については拙論：カフカの「城」に関する試論VIII、フリーダをめぐる覚書(1)（日本歯科大学紀要第18号、1989）を参照されたい。
- 2) Kafka, Franz: Das Schloß, Kritische Ausgabe, S. Fischer, 1983, S. 27.
- 3) a. a. O.
- 4) a. a. O.
- 5) Ebd. S. 28.
- 6) Vgl. Sheppard, Richard: On Kafka's Castle. A Study. London; Helm, 1973. p. 105.
- 7) Kafka, Franz: Das Schloß, Kritische Ausgabe, S. Fischer, 1983. S. 28 f.
- 8) Robert, Marthe: 古きものと新しきもの [L'ANCIEN ET LE NOUVEAU], 城山良彦他訳, 法政大学出版局, 1973, p. 213.
- 9) Binder, Hartmut: Kafka-Handbuch, Band I, Alfred Kröner, 1979, S. 180.
- 10) Kafka, Franz: Das Schloß, Kritische Ausgabe, S. Fischer, 1983, S. 29.
- 11) Vgl. Kafka, Franz: Tagebücher 1910-1923, S. Fischer, 1983, S. 406. チェコとポーランドとの国境にある保養地シュピンドラーミューレ（Spindlermühle）で Kafka はこの「城」の執筆を開始する。1922年1月27日付の日記では「老朽化した豚小屋から御者（Kutscher）が馬達をつれて、這い出して来るかも知れない」と記している。
- 12) Kafka, Franz: Das Schloß, Kritische Ausgabe, S. Fischer, 1983, S. 29 f.
- 13) Ebd. S. 30.
- 14) Emrich, Wilhelm: Franz Kafka, Athenation, 1975, S. 304 f.
- 15) Kafka Franz: Das Schloß, Kritische Ausgabe, S. Fischer, 1983, S. 31.
- 16) Ebd. S. 377.
- 17) Ebd. S. 383 f.
- 18) Ebd. S. 451.
- 19) Ebd. S. 491.
- 20) Kafka, Franz: Das Schloss, S. Fischer, 1967, S. 457. 尚、筆者の手元にある Max Brod による「城」の初版（1926年、Kurt Wolff 社, München）では、助手の Jeremias の看病にかこつけて、ついに不実な K の元を離れていく Frieda, つまり K と Frieda の別離の場面で作品は終わっている。Brod の第3版では第18章の途中（S. 370）、校訂版では第22章の最終頁（S. 402）にあたる。
- 21) Kafka, Franz: Das Schloß, Kritische Ausgabe, S. Fischer, 1983, S. 494 f.
- 22) Kafka, Franz: Das Schloss, S. Fischer, 1967, S. 540 f.

-
- 23) Vgl. Rajec, M, Elizabeth: Namen und ihre Bedeutungen im Werke Franz Kafka, Peter Lang, 1977, S. 157.
 - 24) Vgl. Sheppard, Richard: On Kafka, Castle, A Study, London; Helm, 1973, p. 105.
 - 25) Binder, Hartmut: Kafka in neuer Sicht, J. B. Metzler, 1976, S. 298.
 - 26) Ebd. S. 583.
 - 27) Kraft, Werner: Franz Kafka [フランツ・カフカ] 田岡弘子訳, 紀伊国屋書店, 1971, p. 149.
 - 28) Robert, Marthe: 古きものと新しきもの [L'ANCIEN ET LE NOUVEAU], 城山良彦他訳, 法政大学出版局, 1973, p. 249.
 - 29) Kafka, Franz: Das Schloß, Kritische Ausgabe, Apparatband, S, Fischer, 1983, S. 475 f.
 - 30) Kafka, Franz: Das Schloß, Kritische Ausgabe, S. Fischer, 1983, S. 27.
 - 31) Emrich, Wilhelm: Franz Kafka, Athenation, 1975, S. 409.

尚, 引用文の () 内は原文に即した筆者の補注である。